



避難所薬品配布

多くの薬学生諸氏は、『災害時に薬剤師に何ができるの?』という疑問を持たれると思う。私も薬剤師ボランティアに参加するまでは、そう思っていた。災害現場では、医師や看護師だけが活躍できる場であると。ところが、災害医療の原点である『阪神淡路大震災』

災害医療と薬剤師

の際、被災地の体育館に山積みになった医療用支援物資の整理、管理など、薬剤師でなければできない仕事がたくさんあった。また、この年は感冒が大流行し、医家向けの感冒薬であるP L 顆粒が欠品状態であった。したがって医師が、P L 顆粒を処方するも品物が無い状態。この際にも、P L 顆粒とほとんど同一成分で一般薬のルル錠、ベンザなどが支援医薬品にたくさんあり、P L 顆粒の代用品として使えることを提案できたのも薬剤師。また、商

現場で求められる薬剤師職能—No 2

品名は異なっている、同一成分の薬品を知っていたのも薬剤師であった。

災害現場では、医薬品の管理、供給だけでなく、避難所における被災者の公衆衛生の確保が課題となる。被災後の劣悪な避難所生活を改善したり、服薬中の被災者のケアを行ったり、薬剤師でなければできない仕事がたくさんある。薬学生諸君、大学で受けた教育、知識を、ぜひ、社会に還元してほしい。災害現場は貴方を待っている。以下、私たち日本災害医療薬剤師学会で活躍中の小川薫貴先生と大井友介先生の災害現場における災害薬剤師としての活動を紹介する（日本災害医療薬剤師学会副会長 増田道雄）

災害時に動けずして薬剤師を名乗ることなかれ

日本災害医療
薬剤師学会理事

小川 薫貴

私が本学会会長の西澤先生にお会いしたのは2006年1月28日だった。災害時に薬剤師は何をするのか、たとえ行ったとしても何ができるのかと思っていた私が、去年は能登震災でボランティア参加するに至り、本年は学会の理事を賜ることになった。

西澤先生に見せていただいた1枚の写真、そこにはだだっ広い倉庫に救援物資が無造作に積み上げられていた。災害というと、現場の悲惨な光景しか思い浮かばなかった自分にとって、この写真は衝撃だった。この物資の中から、誰がどうやって必要な医薬品を取り出せるのだろうか。

本学会に入会して会員の先生方と話したり、あるいは各種研修会に参加したりして災害に関する勉強を重ねていく中で、その役割が薬剤師にあることに私は確信を持ち、またそれ以外にも薬剤師が必要とされていることを学んだ。多田先生が前号で挙げた4項目はその代表格である。

能登では薬剤が集積された現場の惨状を目の当たりにした。医療関係者は、自身の仕事に追われ薬剤管理に手が回らず、その要請を出す余裕もない。医療関係者でないスタッフ

は置いてある薬剤の持ち出しについて、処方せんが必要かどうか分からない方が大半であった。私は現地での指揮を執られていた医師に許可を得て、薬剤をリスト化して整頓し、持ち出しや保管に関するルールを整備して現場を離れた。

私は災害を特殊な状況であると思うが、日頃の業務で得た経験や知識が生きる場であると捉えている。日常の延長線上にある災害

避難所における公衆衛生の確保について

日本災害医療
薬剤師学会

大井 友介

い。

2004年、新潟県中越地震が起きた時、毎日のように流れるニュースを見ながら、自分に何かできることはないか考えた。そんな時、現地の薬剤師会が、薬剤師のボランティアを要請していることを知った。それをきっかけに、現地での活動に参加させていただいたのが、私自身の災害医療活動の始まりであった。

その後、07年の能登半島地震の時も参加したが、2回の活動を通じて、7月号で多田治先生が挙げられていた4つの薬剤師の活動の場（①調剤業務②服薬指導とOTC医薬品の配布③避難所の環境・公衆衛生の保持改善④救援医薬品の仕分け）のうち、特に3番目の避難所の環境・公衆衛生の保持改善の重要性を痛感した。

私が参加したボランティア活動は2回とも地震のときのものではあったが、災害時、多くの場合、「避難所」が設けられる。そこは、

について、薬剤師として動くことに特別な意識は持っていない。

災害現場では薬剤師としての技量、知識、および精神力が問われる。普段の業務をただのルーチンとして過ごすのではなく、医療に携わるライセンスを有する者として、高い意識を持つことが求められる。仕事ができる、頭でっかち、理想だけは一人前、そのような人間にプロフェッショナルを名乗る資格はな

一時的とはいえ不特定の方が避難してくる。被災者の多くは、家屋の被害、仕事の問題など、多くのストレスを抱えている。また、ライフライン遮断の環境下で、公衆衛生の確保と心のケアが重要な課題となる。

特に、集団で生活することによる感染症の予防、ストレスからくる持病の悪化などを未然に防ぐことこそ、われわれ薬剤師の役割ではないかと考えている。

能登半島地震の時は、一部の避難所でノロウイルス感染が問題になった。この時、われわれは水の確保、トイレの清掃、正しい手洗いの徹底などを行い、問題の深刻化を食い止めることができた。避難されている方々と私たちの不断の努力と、信頼関係がなければできなかったとも思っている。

私たちの活動は、知識・技能を現地で披露するだけでは成り立たない。そこにいる多くの人たちとの良き人間関係があって初めて成り立つもの。それを大事にしながら今後とも見聞を広め、能力を上げたいと考えている。

HPアドレス：<http://www.saigai-pharma.jp> 連絡先：jpsdr@saigai-pharma.jp



来春薬学部卒業生募集!! (10月20日締め切り)

詳細は、info@daiyaku.co.jpにて
お問い合わせください



山本保健薬局
<http://www.daiyaku.co.jp>

〒596-0076 大阪府岸和田市野田町1-8-6
TEL：072-438-3800 FAX：072-438-3812
人事担当：山本

薬局業務の新たな可能性に チャレンジしてみませんか！

“地域医療”の中で『薬局』は、社会からあるいは医療スタッフからさまざまな面でもっと期待されているのです。当薬局は、地域の中で、医療機関・ナースステーション・ヘルパーステーションなどとの連携を大切に、月平均約120の医療機関からの処方箋を、約4500枚応需している面分業対応薬局です。

- 【在宅医療】在宅ホスピスを含む、月平均40～50名の患者さんの訪問活動を展開しています。
- 【HPN事業】月平均3～5名の患者さんについて、地域の中核病院、および在宅医との十分な連携のもとで、独自の形でHPN業務を展開しています。
- 【糖尿病教室・調理実習】2ヶ月に1度、定期的に当方の管理栄養士・および担当薬剤師によって糖尿病教室を開催しています。さらに、その一環として1年に1度ほど近隣の栄養士会の方の協力のもとで、調理実習を行っています。
- 【その他】上記以外にも、近隣のホームヘルパーを招いての「介護教室」や、小児・児童のための「食育教室」、または「ワーファリン教室」など、きめの細かい地域医療活動を進めています。
- 【研究活動】より質の高い医療の提供を目指して、臨床薬物動態学に基づいた実践的なテーマを拾い上げ、学会等での発表をアクティブに展開しています。
- 【長期臨床研究生・短期実務研修生の受け入れ】1週間の短期実務研修生および、数ヶ月にわたって研究に取り組んでもらう臨床研究生など、大学の臨床教育に協力しています。